関西自然保護機構会誌 *28*（*1*）：*1*－*2*，*2006*

巻　頭　言

ある公開シンポジウムをめぐって

関西自然保護機構副会長　菅　沼　孝　之

年々早くなってきた開花期が，今年は冬が長く続いたためか，昨年に比べると一週間から十日開花を足踏みした。当初２月11日を考えていた奈良県西吉野村（現，五條市）のフクジュソウの観察会を一週間遅らせたが，それでも開花個体は３割を下まわる状況であった。地域起こしで計画が決まっていた各地の「梅まつり」も，「桜まつり」も，「藤まつり」も，「しゃくなげまつり」も主催者は遅い春の訪れにいらいらしていたようである。大台ケ原山のシャクナゲは昔に返って５月の終わりに満開を迎えたようである。

花を愛でるといえるかどうかであるが，照葉樹であるシイノキ*の開花も今年は10年ぐらい前にもどって５月の中旬過ぎの開花となった。樹冠を黄白色にそめて陽光に輝くさまは，それが１本だけではなく，あたり一面に広がると見事というほかない。こういう光景は最近，放置された里山や，鎮守の森でよく見かけるようになった。

第二次世界大戦が終わったころは，集落をとりまく低山の山腹や尾根筋には主としてアカマツ*林やコナラ林が，また，シデ類やカエデ類，エノキやムクノキを交える二次林がひろがっていた。薪炭材をとるのが主体で，一般には20年～30年に１回皆伐して，森林を再生させてきたが，その間でも枝葉は，農家では燃料や田畑の肥料としてなくてはならぬものであった。大戦終了後しばらくすると，燃料として石油製材が主流となり，肥料，消毒薬，殺虫剤等も石油化学製品に頼るようになって，なかには薬害訴訟も起きる始末となった。

低山の貧栄養な土壌によく生育していたアカマツは，自身の老樹化に加えて，落ち葉が積もって次第に富栄養化が進むに従い，アカマツの活力が衰えて，マツノザイセンチュウを運ぶカミキリムシが材へ容易に侵入し，アカマツの枯死への進行を早めていったというのがわかりやすい筋書きである。弱り目に祟り目というところであろうか。

マツノザイセンチュウ，いわゆる松喰い虫は，水平的には緯度の低いところから高い地方へ，また，垂直的には標高の低いところからジワジワと高いところへと蔓延し，アカマツの分布限界に近づいていった。比較的若いマツは助かっても，何年かおいて再び蔓延したときには，生き延びたアカマツも対抗する事ができず，真っ赤に枯れていった。主がなくなった二次林は，種子の供給状態がからんで来るが，下生えを抜き出た高木や亜高木性の樹木はいっせいに生長し始め，すなわち，遷移を始めて，いつの間にか照葉樹林の構成種が姿を覗かせるようになる。もちろん，その蔭には収奪された貧栄養の土壌から，蓄積された準・富栄養の土壌への発達が貢献しているのを見逃すことはできない。

照葉樹林の構成種が芽生えて変化の兆しがみえてきたが，鳥が種子を運んでくるとか，小動物が種子を運んでくるとかというようなことがないと，遷移の道筋は遠回りになるであろう。種子の供給源はたとえ１本であってもほしいところであるが，

大きい木は消えかかりそうでも稚樹ががんばっていて，次第に森林が回復してくることがあるものである。

京奈和自動車道の京都府南部部分は「どんぐり街道」と呼ばれている。街道筋にはアラカシやシラカシが並木をつくっているが，切り開かれた丘陵にはシイノキが茂って，花の頃には樹冠が一面に黄白色に染まる。そのシイノキが次第に増えると奈良市の春日山原始林のように山一面が黄白色に変わる。また，京都市の伏見稲荷大社の稲荷山では山麓から山頂にかけて，黄白色の龍がお山を駈け登って天に向う態を見ることができる。最近の京都のこの時期の東山の東面に屏風のように立つ斜面が斑模様ではあるが，黄白色に染まるようになった。

そのような時期に古都・京都の景観に関した，主題は「シイノキの分布拡大は是か非か」という市民参加型の公開シンポジウムを「ニッセイ財団重点研究，古都京都を取り巻く地域生態系の保全と生物資源の利活用に関する研究会」が，京都新聞社ホールで開催した。

最初の演者は東山を描いた絵画から，場所を特定して「植生景観の歴史」について，京都の景観を端的にいえば，マツ林に返せと熱く語った。ほかに「シイノキの分布拡大過程」，「景観の保全と病虫害」，東山から目を転じた「嵐山における歴史的な森林景観の変遷」，「国有林ができる景観対策」の話題の提供があった。ほとんどの演者は，アカマツ林は景観の重要な要素であると解きながら，誰一人として植物群落の遷移系列をストップさせてアカマツ林を「持続群落」として管理するにはどうしなければいけないかを述べた人はいなかった。添えられていたアンケート用紙から，管理に要する費用を市民に負担させるためのマインドコントロールのための第１弾としか感じられなかった。

このシンポジウムで花粉分析の結果を引用して，平安京以前，1000年ごろまでは照葉樹林であったが，1961年には東山の景観の40％をアカマツ林が占め，シイ林は11％であったものが，2004年にはアカマツ林はほとんど見られず，代わってシイ林は38％まで増加したと花粉分析の結果を述べていたが，西暦1000年ごろの照葉樹林を支配する優勢な樹種は何であったかについては，触れていなかったのは残念である。しかし演者は触れていても映写された文字が小さくて判らなかったのかも知れないが。

ここで重要なことは，京都東山の広い面積すべてが均一な土地（土壌・地形）条件ではないということである。焼きあがったパンの皮だけをみて，粒餡だ，いや濾餡だ，白餡だなどなどと論議していても，多様性をもたせた良い森林を作ることはできないだろう。むしろ濾餡にするか，粒餡にするか，白餡にするか，それともクリームパンにするか，はたまたフランスパンにするか，それは概観からの好みでえらぶべきではなく，その土地がもつ潜在力を現生する草本類をふくめた植生から判断して，最適の樹種を導入すべきであろう。

世界遺産を擁する京都であるから，将来，土砂崩壊留めの擁壁をあちこちに造って，身を守らなければならぬようなことだけは避けなければならない。そうして景観だけに左右されない，賢明な植生配置を考慮するように希望したい。

（＊　スダジイとコジイ（ツブラジイ）はシイノキと記述し，また，植栽されたクロマツはここではアカマツに含めた。）